

〈論文〉

インドネシアにおけるLGBT運動を取り巻く状況 —LGBT運動の展開と近年の対立の構図—

大 形 里 美*

要 旨

インドネシアでは、イスラム文化圏としては珍しく、LGBT（Lesbian〈女性同性愛者〉、Gay〈男性同性愛者〉、Bisexual〈両性愛者〉、Transgender〈性別越境者〉の頭文字をとった単語で性的少数者の総称。）運動がこれまでかなり活発に行われてきた。とりわけ1998年の民主化以降、レズビアン運動が女性運動の一部に組み込まれたことによって、同国におけるLGBT運動は、外部に開かれた政治社会的運動として次第に可視化される存在となっていく。しかしそうした同国のLGBT運動の進展は、同時に同国内の保守派イスラム勢力による反LGBT運動を活発化させることとなり、近年、LGBT問題は急速に政治イシュー化している。LGBT脅威論が、マス・メディアやソーシャル・メディアなどを通じて社会一般に広められ、一般のイスラム教徒たちの間からもLGBTに対して明らかに否定的な反応が見られ始めている。現在同国には、西欧思想に影響を受けた世俗的なLGBT運動の潮流と、西欧的な人権意識を共有する多元主義的（リベラル派）イスラムの潮流が協力関係を築き、保守派イスラム勢力と対峙している構図がある。LGBT運動の進展は、同国のイスラム社会内部の亀裂を深めている。

キーワード：インドネシア、LGBT運動、レズビアン運動、イスラム

* おおがたさとみ、九州国際大学現代ビジネス学部、ohgata@cb.kiu.ac.jp

1 はじめに

2000年代に入り、同性婚を認める国が次々と増え、2018年1月には、同性カップルの権利を保障する制度を持つ国・地域は世界の約20%にまで及んでいる¹。2006年には、国際人権法が性的指向および性自認に関してどのように適用されるのかをまとめた『ジョクジャカルタ原則』が国際会議において採択され、翌2007年にジュネーブ国連人権理事会で承認された。そして以後、同原則は、各国においてLGBTに関する啓蒙活動や政策策定の指針として参照されるようになってきている。

こうした世界的なLGBT運動の進展を背景に、1998年の民主化以降、政治的自由度が急速に拡大したインドネシアにおいてもLGBT運動が進展し、それと同時に、それを危険視する保守派イスラム勢力による反LGBT活動も活発化してきた。近年、同国ではLGBT関連の催しがイスラム過激派による圧力で中止に追い込まれる事件がいくつも起きている。また、TV放送において男性が女性のような立ち居振る舞いをすることを禁止する通達が発令されたり、LGBTの権利容認の賛否をめぐってTV討論が開催されたりしたことで、LGBTをめぐる議論が活発化するとともに、LGBT問題をめぐる意見対立が表面化してきている。中東イスラム諸国のLGBTを取り巻く状況²などと比較すれば、インドネシアの状況ははるかにましではあるが、インドネシアにおいても、近年反ポルノ法違反を理由に警察がゲイ・パーティーを取り締まる事件なども頻発しており、同国のLGBTを取り巻く状況は近年確実に変化してきている。

本稿では、一国としては世界最大のイスラム教徒人口を抱えるインドネシアにおいて、近年急速に政治イシュー化しているLGBT問題に焦点をあて、同国のLGBT運動がいかなる経緯と背景の下に活発化してきたものであるのか、またLGBTの諸権利のために闘う活動が現在どのような状況に置かれているのかを考察する。

2 先行研究

インドネシアの LGBT に関する研究で最も古いものとしては、1982年から LGBT 運動の先駆者として活動し続けているデデ・ウトモによる研究 (Oetomo 1991, 2002) が挙げられる。かつてヌサンタラ (インドネシア群島) の伝統社会においては、トランス・ジェンダーが特殊な能力を持つ存在として特別な役割を果たすなど、同性愛者が社会に受け入れられ制度化されていたという³。しかしデデは、そうした状況は20世紀に入り、西洋文明と近代派イスラムが優勢となる中で変化し、人々が次第に彼らの振る舞いを拒否し、ハラム (禁忌) として侮辱するようになったと指摘する。ただ現在においても、とりわけ下層の人々の間では、伝統社会の文脈において同性愛者たちを受け入れようとする姿勢の痕跡がまだ見られ、さらに今日では、西洋からの新たな思想に影響を受けた知識人階層からも、再び同性愛者を受け入れようとする姿勢が生まれ始めているとデデは指摘している⁴。

インドネシアのレズビアンに関する研究としては、サスキア・E. ウィーリングによる研究 (Wieringa & Blackwood, 1999) があり、彼女は、同国のレズビアンたちを参与観察する中で、西欧のレズビアンたちの関係性とは異なる関係性があることを指摘した。サスキアは、インドネシアのレズビアンたちは男性役、女性役というジェンダー役割を演じており、そこには男性性を女性性よりも優れたものとする社会の仕組みが問題として内在していると分析する。

インドネシアにおけるレズビアン運動の歴史についてのまとまった著述としては、スリ・アグスティンによる研究 (Agustine, 2013) が挙げられる。同研究は、同国のレズビアン運動が、1980年代から1998年の改革までの同国のレズビアンたちによる閉鎖的な活動状況から、1998年の改革以降、外部に開かれた力強い政治社会運動へとなっていった経緯を描いている。

以下、デデの議論やアグスティンによる近年の研究なども参照しつつ、インドネシアにおける LGBT 運動の発展プロセスと、LGBT 運動をめぐる近年の対

立の構図を明らかにしていきたい。

3 インドネシアにおけるLGBT運動の展開

3.1 LGBT運動の展開

インドネシアにおけるLGBT運動は、1920年代に同性愛のコミュニティーがオランダ領東インドの大都市に現れ始めたことに始まるが、現代にまで続くオープンなゲイの組織ができたのは1980年代以降のことだ⁵。それに先立ち、1969年にはジャカルタにゲイ・コミュニティーを支援するための組織ヒワッド（HIWAD = Himpunan Wadam Djakarta）が当時のジャカルタ州知事の便宜を受けて設立されており⁶、この頃から少しずつゲイ・コミュニティーが組織化されていった。そして1981年に同性婚に関するニュースが世界中を駆け巡った翌年の1982年には、インドネシア発（アジア発）のオープンなゲイ組織、ラムダ・インドネシア（Lambda Indonesia）が中ジャワ州の古都スラカルタ（ソロ）に設立された。同組織はデデ・ウトモによって設立されたもので、事務局はソロにあったが、ジョクジャカルタ、スラバヤ、ジャカルタにも支部が結成され、ジョクジャカルタには1985年に「ジョクジャカルタ・ゲイ親睦会」（PGY）なども結成された。現在まで活発に活動をしているLGBT組織「ガヤ・ヌサンタラ（GAYa Nusantara）」は、上記のラムダ・インドネシアの活動を引き継ぐ形で1987年に設立された組織である⁷。ちなみにラムダ・インドネシアが1982年から1984年まで発行していた機関紙『G：明るい生活スタイル（G：Gaya Hidup Ceria）』は、現在インターネット上で閲覧可能で、内容を見てみると、ホモ・セクシュアルに関する真面目な議論や悩み相談、同性に寄せる恋心を綴った詩などが掲載されている他、友達を探すための連絡先つきの自己紹介欄などもあり、インターネットがなかった時代に同機関誌がさまざまな役割を果たしていた様子がうかがえる⁸。

1993年には、中ジャワ州の保養地カリウランに全国各地から40名ほどの

LGBTが集まって「インドネシア・レズビアン&ゲイ会議 (KLGJ)」が開催された。その際、上述のガヤ・ヌサンタラが、この会議で結成された「インドネシア・レズビアン・ゲイ・ネットワーク (JLGI)」の調整役になるなど、その後、同国の LGBT 運動において重要な役割を果たしていく⁹。

1999年には、スラバヤで、インドネシア初のゲイ・プライド (*ゲイ・プライド = LGBT の人々が自己の性的指向や性自認に誇りを持つべきとする概念を表す言葉) のパレードが開催されたが、このパレードもガヤ・ヌサンタラが中心となり、スラバヤ市ゲイ協会 (PERWAKOS = Persatuan Waria Kota Surabaya) やフランス文化センター (CCCL) と協力して実施したものであった。こうしたイベントがマス・メディアに取り上げられるようになったことで、1990年代末以降、インドネシアの LGBT 運動は次第に社会的に可視化される存在となっていった。

ちなみに現在インドネシア国内には、LGBT を束ねる二つの大きな組織がある。「インドネシア・ゲイ・ネットワーク GWL-INA (2007年結成)」と「インドネシア LGBTIQ フォーラム (Forum LGBTIQ Indonesia, 2008年結成)」である。GWL-INA は国内28州に計119の組織 (2013年のデータ) を傘下に束ねる統括組織で、もともと HIV と性病の撲滅を推進することを目的に結成されたため、HIV 撲滅のための国際組織や国家エイズ撲滅委員会から活動資金を得ているが、活動内容は制限されている。一方、Forum LGBTIQ Indonesia は、オランダに本部を置く開発支援のための財団 Hivos から運転資金を得て、性的権利に関わるより広いプログラムを推進する目的で設立されたもので LGBT 組織をカバーできるようネットワークを広げることを目指す。GWL-INA のようには組織化されていない (USAID, 2013)。

3.2 閉鎖的なレズビアン運動からより広い政治社会運動へ

ここ20年くらいのインドネシアにおける LGBT 運動の発展には目を見張るものがあるが、同国の LGBT 運動が飛躍的に発展した過程において同国のレズビアン活動家が大きな役割を果たしたことは特筆に値する。そこで以下、同国

におけるレズビアン運動の発展とレズビアン運動がLGBT運動の中で果たしてきた役割について見ておきたい¹⁰。

インドネシアにおいて、レズビアン組織は1980年代にいくつか結成されたが、いずれも数ヶ月で活動が停止したとされる。当時、レズビアンたちの多くは教育レベルが低く、流しやサロン、セックスワーカーなどで生活する者が多く、職業へのアクセスが困難であった。そこで当時のレズビアン組織は、まずレズビアンたちの手に職をつけることで、経済的自立と社会的地位の向上を目指そうとした。また当時のレズビアンたちは、自分がレズビアンであるということに罪悪感や戸惑い、迷いを感じると共に、自己のアイデンティティーの可能性について知る能力をもっていなかったため、当時のレズビアン組織は、レズビアンたちが精神面においても社会の中で自信が持てるよう、彼女たちの自己評価を向上させることを活動の目的としていたという。

アグスティンは、こうした1980年代のレズビアンの闘いの特徴について、個人的にも集団的にも自己のアイデンティティーに関わる事柄、つまり精神的問題や家族との関係など、レズビアンたちが日常生活で抱える諸問題を扱うことにレズビアン組織の活動が限られていたと指摘している。当時は、レズビアンたちに対する抑圧があったことに心を動かされ、彼女たちが抱える問題に関心を寄せ、彼女たちの活動に協力したいと思う学生グループや女性グループ、HIV/AIDSや人権問題に関わる組織などが存在してはいたものの、レズビアンたちの活動自体が、まだ閉鎖的でレズビアン・コミュニティの内部に限定されたものであったとアグスティンは分析している。

しかし1990年代に入ると、レズビアンたちの活動はよりオープンなものへと変化していったという。1993年には、既述の「インドネシア・レズビアン＆ゲイ会議 (KLGJ)」に参加した二人のレズビアンなどが中心となって、チャンドラ・キラナ (Chandra Kirana) というレズビアン組織を結成した。そして同組織がインドネシア語と英語の機関誌を発行したこともあり、インドネシアのレズビアンたちは、1990年代以降、国際的なLGBT運動にも積極的に関わって

いくようになった。

また1990年代には、南スラウェシのマカッサル、カリマンタン、西スマトラなど、ジャワ島外でレズビアン運動が盛んになったとされる。とりわけ西カリマンタンでは、メンバーの多くがレズビアンからなるサッカーチーム「ガネーシャ (Ganesha)」が、インドネシアの独立記念日にサッカー大会をコーディネートすることを地方政府から依頼されるなど、レズビアン組織が公的な場で受け入れられる状況も生まれていた。

そして1998年は、インドネシアのレズビアン運動が質的転換を迎える重要な年となった。この年、インドネシアのレズビアン運動は、女性運動と連携することでより広い政治社会運動へと変化した。具体的には、1998年の政変（スハルト政権の崩壊）直後に結成された「インドネシア女性連合 (KPI=Koalisi Perempuan Indonesia。以下、KPIとする)」が、15からなる同組織の活動分野の一つとしてLBT (LGBTからゲイを除いたもので、ここでのLBTのTは「女性トランス・ジェンダー (女性から男性へのそれ=priawan)」に限定される)を加えたことによって生まれたレズビアン運動の質的転換であった。LBTは15あるKPIの利害グループの一つとなり、「第15セクター」と名付けられた。つまりLBTがKPIの利害グループとなることで、インドネシアのレズビアン運動は女性運動の一部に組み込まれたのである。2000年にジャカルタに設立され、ウェブサイトと会報を通じてメンバーを増やしたスワラ・スリカンディなども、KPIの「第15セクター」のメンバーとなっている。

こうして民主化時代のインドネシアにおいて、レズビアン運動は女性運動に包摂されることで、それまでの排他的な運動から包括的でより大きな政治的運動へと変化していった。そしてアドボカシー活動に力を入れるなど、政治的に「カミング・アウト」していき、急速に可視化されるようになっていった。

その後、全国各地にレズビアン組織が結成され、2002年にはKPIのジャカルタ支部で、2004年には西スマトラ支部、2007年には南スラウェシ支部で、それぞれ「第15セクター」が結成されていった。当初は、社会的スティグマを考

慮してLBTという名称を避け「第15セクター」という名称を使用していたが、現在は「LBTセクター」に改称している。この名称変更は、ジャカルタ、西スマトラ、南スマトラの「第15セクター」からの提案を受けたもので、LBTたちが直面している問題をKPIの全ての幹部とメンバーたちの間で共有し、メンバーたちがLBTの諸権利の保障を組織の共通利害として認識するようにという目的をもって行われたものであった。そしてその後も国内各地でKPIに加わるレズビアン数は増加していった。

2000年代前半になると、LGBTの活動家らは、LGBTを政治的アイデンティティーとするようになり、外部のグループから支援を受けられるシステムを構築していった。2003－2004年には、LGBTの個人と組織、および非LGBTの個人と組織をメンバーとするLGBTネットワーク「ジャリಂಗン・ワルナ・ワルニ（Jaringan Warna Warni；「色とりどりのネットワーク」の意）」を構築し、国家人権委員会への働きかけなども行うようになっていった。この時期は、LGBT運動がネガティブなニュアンスなしにマス・メディアで注目されるようになっていた時期であった。そうしたLGBTに好意的な時代の風を受けて2003年には、LGBTをテーマに扱った映画『アリサン（Arisan）！』（アリサンは「頼母子講」を意味し、インドネシアではとりわけ主婦たちの間で頻繁に行われている）が公開され、2004年のインドネシア映画祭では最優秀映画館上映作品賞、最優秀主演賞、最優秀助演賞、最優秀監督賞など数多くの賞を受賞するほど高い評価を受けた。

こうしたLGBT運動を温かく迎える社会の雰囲気を追いつきに、この時期、公衆の面前でレズビアン組織やグループの設立宣言を行ったり、レズビアン個人が自分たちの諸権利をさまざまな出版メディアや電子メディアにおいてキャンペーンする姿がかなり頻繁に見られるようになっていった。とりわけ2009年頃からはFacebookなどのソーシャル・メディアの利用が活発になり、インドネシア各地で、レズビアン問題に特化した組織のウェブサイトや個人のブログ、オンライン・グループなどを通じて、情報が活発に発信されるようになっていった。そうしたこともあり、個人として、またグループや組織として、レ

ズビアンはますます可視化される存在となっていく。

2000年代半ばから後半にかけては、いくつかの重要なレズビアン組織が設立されている。レズビアン・グループのための活動・情報センター「女性レインボー研究所 (Institute Pelangi Perempuan)」(2005年設立)、差別や暴力に苦しむ LGBT 被害者たちの救済活動を行う「レインボー潮流 (Arus Pelangi)」(2006年設立)、研究、出版、レズビアンのためのアドボカシー・センター「アルダナリ研究所 (Ardhanary Institute)」(2007年設立) などだ。

3.3 『ジョクジャカルタ原則』、そしてレズビアン組織による国際的活躍

2000年代には、国際的な LGBT 運動の興隆があり、2006年にはインドネシア、ジョクジャカルタ市のガジャマダ大学において LGBT に関する国際会議が開催され、国際法律家委員会や元国際連合人権委員会構成員、および有識者らが草稿に基づいて議論し、LGBT の諸権利を定めた『ジョクジャカルタ原則』が採択された。そして翌2007年にはジュネーブの国連人権理事会で承認され、採択から10年を経た2017年には『ジョクジャカルタ原則+10』も採択されている。同原則は、日本ではマス・メディアが現在に至るまでほとんど取り上げず認知度が低い、諸外国ではかなり有名な原則である。インドネシア国内においては、上述のアルダナリ研究所などが、「性的指向とジェンダー・アイデンティティー (SOGI)」のモジュール開発とその普及活動と共に、同原則の普及に力を入れている。

2000年代後半以降のインドネシアのレズビアン組織による国際的な活躍振りは注目に値する。2008年には、インドネシアから4人の LGBT 活動家がタイのチェンマイで開催された「国際 LGBTI 協会アジア支部 (ILGA-Asia = Asian Region of the Int'l Lesbian, Gay, Bisexual, Trans and Intersex Association)」会議に参加しているが、その4人のうち3人がレズビアン組織の代表で、うち二人が女性代表理事に選出されたという。このことからインドネシアの LGBT 運動におけるレズビアン組織の存在がいかに大きいかかわかる。

インドネシアのレズビアン組織は、2011年にはASEANにも代表を送り、「性的指向とジェンダー・アイデンティティー (SOGI)」問題がASEANの市民会合の中で討議されるよう要請するなど、国際的なLGBT運動に積極的に関わっている。また同国のレズビアン活動家らは、アジア太平洋地域のレズビアンたちを代表して「国際ゲイ & レズビアン人権委員会 (ILGHRC = the International Gay and Lesbian Human Rights Commission)」(2015年にOutRight Action Internationalに改称)のアドバイザー機関のメンバーとなったり、市民社会を代表してインドネシアにおける「女性差別撤廃条約 (CEDAW)」の国内における実施状況を報告するために国連会議にも出席したりしている。

とりわけアルダナリ研究所は、2011年、レズビアン組織として初めて「女性のための国家人権委員会」によって「アジア太平洋 女性・法律・開発フォーラム (APWLD = Asia-Pacific Forum on Women, Law and Development)」のメンバーとして派遣され、レズビアンの諸権利が域内の市民運動の会合の中で取り上げられるよう積極的に働きかけるとともに、女性に対する暴力の文脈の中でレズビアンに対する暴力についての報告書を作成するなど、国際的にも重要な役割を果たしている。

これらのことから、インドネシアのレズビアンたちは、女性運動の一部に包摂されたことで、女性組織の代表として国際的な会議体でLGBT問題が討議されるよう提起するチャンネルを得たと見る事が可能である。

しかしながら、LGBTの諸権利のためにこうしたアドボカシー活動や研究・出版・啓蒙活動などを行うNGOは、イスラム過激派から電子メール、電話、SMSなどを通じて、活動の中止を求める脅迫を受けるようになって久しい。アルダナリ研究所は、組織に対するテロ行為を避けるためにオフィスの移転を余儀なくされ、現在のオフィスの住所は公にされていない。民家を借りあげたオフィスは、狭く入り組んだ車も入れない路地裏の奥のわかりづらい場所であり、安全のために組織の看板なども掲げられていない。

4 イスラム教義との関わり：リベラル派イスラム学者の見解

インドネシアはイスラム教が主流の国であるため、当然のことながら、LGBTをめぐる動向にもイスラム教義がLGBTをどのように捉えているのかが重要な意味を持つ。

LGBTに関連し、インドネシア・ウラマー協議会(MUI)は2008年ファトワー(法的裁定)を出しており、「ゲイは男性であり、独自の性別として見られることはできない」、「ゲイの逸脱したあらゆる振る舞いはハラム(禁忌)であり、本来の天性へと戻されるよう努力されなければならない」とすると同時に、保健省や社会省に対し、心理学者らも参加させてゲイがノーマルな人間に戻るよう指導するよう呼びかけている¹¹。

また同性愛に関しても、現在ほとんどのイスラム学者は、クルアーンの預言者ルート(キリスト教の旧約聖書の預言者ロト)に関する章句(高壁章¹²、詩人たち章など)や、預言者ルートとその家族以外のすべての民が天災に遭ったというクルアーンにおける逸話を、同性愛を禁じる神からのメッセージとして解釈している。しかしながら、インドネシアのイスラム学者の中には、LGBTの基本的人権は擁護されるべきだと考え、上述の章句について別の解釈を行うリベラル派イスラム学者らもいる。とりわけジェンダー平等の視点から新たなイスラム女性法学の構築を目指して活動を続けてきたイスラム学者らは、同性愛に関連するクルアーンの章句についても、理性を用いて合理的に解釈することを選択している。以下、そうしたリベラル派イスラム学者らによる教義解釈についても触れておきたい。

リベラル派イスラム学者を代表するキヤイ・フセイン・ムハンマドやムスダ・ムリアら¹³は、イスラムで禁止されたのは、暴力や強制、苦痛をとまなうソドミーなどの性行為であって、同性愛という性的指向が禁止されたのではないと解釈している(Muhammad et al., 2011)。キヤイ・フセインは、9世紀の優れたイスラム歴史学者でイスラム法学者でもあったイマム・アッタバリの

見解を根拠に、クルアーン高壁章で非難されている「淫らなこと」とは、ソドミー (Liwath) という行為を指していると述べている。そしてソドミー自体は、異性愛、両性愛の者によっても行われうる行為であり、同性愛は性的指向であって性行為ではないため、同性愛という性的指向がクルアーンで非難されているのではないとする。そして預言者ルートとその家族を除く民たちが天災に遭ったのは、同性愛行為に対する懲罰ではなく単なる天災であったと考える。

ちなみにキヤイ・フセインによれば、イスラムの伝統的書物には、「両性具有者 (khuntsā)」、「女性のような男性 (mukhannats)」、「男性のような女性 (mutarajjilah)」についての議論があり、「女性のような男性」は、「天性による女性のような男性」と「故意による女性のような男性」という二つのカテゴリーに分けられているという。そしてかつての古典の時代のイスラム学者らは、預言者ムハンマドの教友にも女性のような男性が存在し、預言者ムハンマドによって受け入れられていたことがハディース（預言者ムハンマドの言行録）からわかるため、生まれながらの「天性による女性のような男性」については、蔑まれたり、処罰されたりしてはならないとし、非難され処罰の対象とされるのは「故意による女性のような男性」のみだとしている。

ちなみに、こうしたLGBTの人権を擁護する議論を展開するリベラル派のイスラム学者らは、LGBTの諸権利を認め擁護するよう国の人権機関などに働きかけを行なっているNGOなどと協力関係にあり、講習会などで講師を務めたりしているが、その影響力はかなり限定的である。

近年、「国家人権委員会 (Komnas HAM)」や「女性に対する暴力禁止国家委員会 (Komnas Perempuan Anti Kekerasan terhadap Perempuan)」の理事の中に、LGBT問題に理解をもつ多元主義派（リベラル派）のイスラム学者が何名か入ってきたことで、それらの機関によってLGBTに関する啓蒙プログラムが実施されるようになるなど新たな変化も見られる。とりわけ「女性に対する暴力禁止国家委員会」は、LBTを利害グループとしてきたKPIのこれまでの活動成果なども背景にあり、LGBTであるという理由で差別があってはならないとする決定を

2011年に組織として確認している。同委員会の現会長マスルハは、リベラル派イスラム活動家であつてKPIの会長を務めた経験もある人物で、上述のアルダナリ研究所やアルス・ブランギなどのNGOや、NU、ムハマディヤーのLGBT問題に理解を示す宗教指導者らとも緊密に連携しつつLGBTについての啓蒙活動を推進している¹⁴。

国家人権委員会も2007年からLGBTに関する研修も行なっているというが、2012年にトランス・ジェンダーの権利に関する研修を行なった際にはイスラム擁護戦線(FPI)から襲撃を受けたとのことで、現在はLGBTの名称は使わず目立たない形で啓蒙活動を行なっているという¹⁵。ちなみに同委員会の理事たちのLGBT問題に関する見解は一枚岩ではなく、保守的な考え方の理事も少なくない。組織内部の投票によって理事が選出される「女性に対する暴力禁止国家委員会」とは異なり、国家人権委員会の7人の理事は、国会で承認を受けなければならない、LGBT問題について保守的な考え方の国会議員が多ければ、LGBTの人権擁護を主張するリベラル派の理事が承認されることは当然難しくなる。実際、インドネシアにおけるLGBT運動のパイオニア的存在として知られ、現在も精力的に活動しているデデ・ウトモは、前回の理事選考で最後まで残っていたが、最終的に国会での承認を得ることができなかった。関係者の間では、彼が承認を得られなかったのは、彼がLGBTだったからだと見られている。今後、国内情勢や理事構成のあり方次第で、国家人権委員会のLGBT問題についての活動がより消極的になる可能性があることは言うまでもない。

5 LGBTに対する人々の意識

5.1 LGBTの諸権利に関する意識調査の結果

ここでインドネシアのイスラム教徒たちがLGBTの諸権利についてどのような意識をもっているのか、筆者が2006年から2007年にかけてインドネシア国内6地域（ジャカルタ、ジョクジャカルタ、ジョンバン、マドゥラ、ロンボック、マカッサル）において、各地域200人ずつ、合計1200人のイスラム教徒を対象に実施した意識調査¹⁶の結果を見ておきたい。図1は、6つの調査地域で計1200人に対して筆者が行った「あなたは同性愛者に対する諸権利を認めるべきだと思いますか？」という質問に対する回答結果である。図2、3は、ジャカルタとジョクジャカルタ、それぞれの回答結果である。

これらの調査結果から、インドネシアのイスラム教徒たちは男女共に同性愛者の諸権利を認めることに反対する者の割合が圧倒的に多いことがわかる。同性愛者の諸権利を認めることに反対する者の割合は6つの調査地域全体では男性65%、女性66%、一方、賛成する者の割合は男性24%、女性19%であった。

この調査結果は、生活スタイルの近代化と同性愛者の諸権利に対する考え方には、必ずしも明らかな相関関係は見られないということも示している。大都市ジャカルタのイスラム教徒たちが、地方都市ジョクジャカルタのイスラム教徒たちと比較して、必ずしも西欧的な価値観をより共有しているわけではないことが読み取れる。つまりジャカルタは大都市であるが、同性愛者の諸権利を認めることに賛成の割合がジョクジャカルタより少なく、保守的な傾向が見られるということである。大都市ジャカルタには、全国各地からさまざまな民族が集まっており、その中には保守的な思想が支配的な地域の出身者も少なくないということが背景にある。

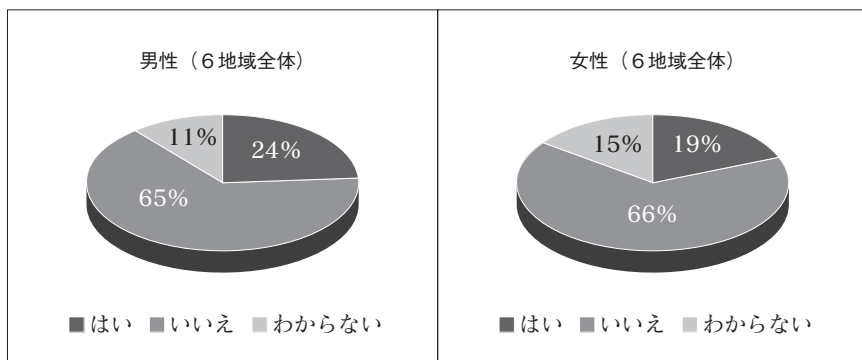


図1 Q.「あなたは同性愛者に対する諸権利を認めるべきだと思いますか？」

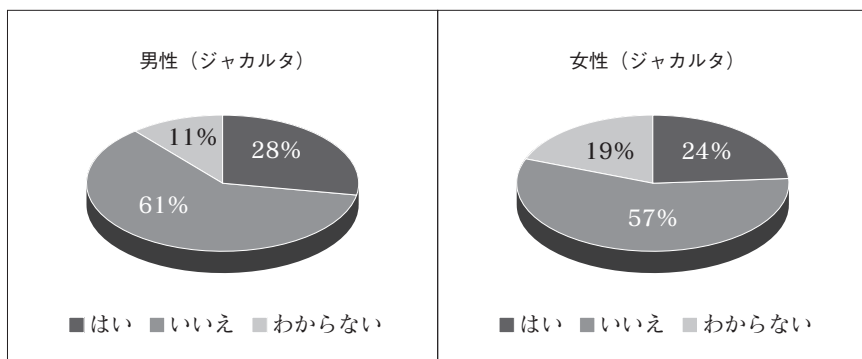


図2 Q.「あなたは同性愛者に対する諸権利を認めるべきだと思いますか？」

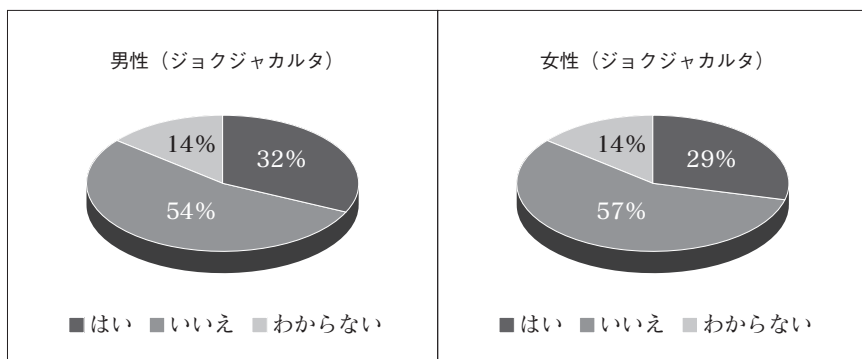


図3 Q.「あなたは同性愛者に対する諸権利を認めるべきだと思いますか？」

5.2 LGBTの諸権利を擁護すべきとする勢力と擁護すべきでないとする勢力の対立

先に見たように、LGBTの諸権利を擁護すべきかどうかについての一般のイスラム教徒たちの見解は、擁護すべきでないとする者の割合が圧倒的に多い。しかしながら、既述のように、2000年代前半からLGBTと非LGBTの組織が連携してLGBTを支援するための市民ネットワーク「ジャリンガン・ワルナ・ワルニ」を構築したり、LGBTをテーマに扱った映画『アリスン』が映画祭で優秀賞を受賞して注目を集めるなど、LGBTを支援するための活動が徐々に形成されてきていたことも事実である。

そこで、ここではそうしたLGBTの諸権利を擁護すべきとして活動を行なっている勢力、またLGBTの諸権利を擁護すべきでないとする勢力が、それぞれどのような組織や個人によって構成されているのかを確認しておきたい。

まずLGBTの諸権利を擁護すべきとして活動を展開しているのは、多元主義を標榜するNGO組織や個人で、それらの中にはイスラム系組織やリベラル派のイスラム学者や活動家らも含まれている。具体的には、LBTセクターを設けることでレズビアンたちによる運動を女性運動の中に取り込んだKPIの他、ワヒド元大統領の穏健なイスラム思想の在り方を受け継ぐ「ワヒド研究所(The Wahid Institute)」、民主主義、政治的な自由、人権についての研究と政策提言を行っている「スタラ研究所(Setara Institute)」、民主主義、ナショナリズム、市場経済の研究を掲げる「フリーダム・インスティテュート(The Freedom Institute)」、東ジャワ地域においてワヒド元大統領の思想と理想を受け継ぐ活動を行なっている「東ジャワ反差別イスラム・ネットワーク(Jaringan Islam anti Diskriminasi (JIAD) Jawa Timur)」などの組織があげられる他、2001年に結成されたリベラル派イスラム知識人たちによるオープンな組織「リベラル派イスラム・ネットワーク(JIL)」に属する者たちもLGBTの諸権利は擁護されるべきだと考えている。その他、公的機関として「女性に対する暴力反対国家委員会」が、LGBTであるという理由で差別があってはならないことを組織として決定しているこ

とは既述の通りである。しかしながら先に述べた国家人権委員会の他、青少年保護国家委員会については、内部に LGBT 問題に理解を示す委員と、理解を示さない保守的な委員がおり、組織として統一した見解はなく、啓蒙活動も公にはほとんど行われていない。

一方、LGBT の諸権利を認めるべきではないとする勢力には、しばしばディスコを襲撃したり、異端とされるアフマディヤー教団やシーア派の施設や信者らの住居を襲撃したりすることで知られるイスラム過激派組織、「イスラム擁護戦線 (Front Pembela Islam=FPI。以下、FPI とする)」そしてインドネシア・ウラマー協議会 (MUI) やインドネシアを代表する二大イスラム組織 NU (エヌ・ウー；ナフダトゥール・ウラマーの略称) と、ムハマディヤーの主流派など国内の保守派勢力が含まれる。

LGBT 問題に関しては、ムハマディヤーも NU も総じて保守的で、これらの組織内部の少数派であるリベラル派のみが LGBT 運動に理解を示し、外部の NGO 組織やネットワークに加わるなどして繋がりをもっている。しかし、2004 年にリベラル派イスラム学者で宗教省幹部であったムスダ・ムリアが中心となり進歩的すぎる内容の婚姻法改革案を公開してしまったためにリベラル派が激しい非難を浴びるという事件があり、同事件の余波でその後両組織の幹部からリベラル派が一掃され、現在に至るまで両組織におけるリベラル派の立場はかなり弱くなっている。

上述の LGBT に反対する諸組織の中でも、とりわけ「白いイスラム服を着たチンピラ」と揶揄される FPI は、ことある毎に LGBT 関連の集会を妨害してきたことで有名である。LGBT 関連の集会は、民主化時代に入った 1990 年代末から反対勢力によって阻止される事件が目立ち始め、2005 年 12 月には中ジャワ州のプルウォクトでトランス・ジェンダーが殺される事件が起きている。また 2010 年にはホモ・フォビアとトランス・フォビアに反対する催しが FPI によって妨害され、ニュー・ハーフの参加者が FPI に殴られ、イベント参加者らが避難するという事件も起きた。この時の催しは、警察の許可の下に国家人権

委員会が開催していたというが、警察はFPIによる妨害を阻止する明確な姿勢を示さなかったと関係者は証言している¹⁷。宗教的マイノリティーの人権侵害に対して、警察が及び腰であることは常に指摘されているところである。

2012年には、カナダ出身のイスラム教徒でレズビアン・ジャーナリストとして知られるイルシャッド・マンジ (Irshad Manji) ¹⁸による著書『アッラー、自由、そして愛 (Allah, Liberty, and Love)』のインドネシア語版が出版され、彼女を囲む会がジャカルタで開催されたが、FPIの要請を受けて集会が途中で警察によって強制的に解散させられるという事件も起きている¹⁹。彼女を囲む集会は、ジョクジャカルタのガジャマダ大学においても「宗教と文化交流研究センター (Center for Religious and Cross-Cultural Studies = CRCS)」の主催で開催が予定されていたが、やはり社会团体からの圧力があるため治安に配慮するとの理由で学長が中止の決定を下した。

そして同じ2012年には、やはりレズビアンとして知られるレディー・ガガによる公演が、イスラム団体による公演開催反対の抗議デモによって中止に追い込まれている。この時も「レディー・ガガが歌の中で血の儀式的パフォーマンスを見せるなら、我々も (レディー・ガガが) ジャカルタに講演をしにやって来ることを拒否するために血を流して闘う」という内容の脅迫文をFPIが流したことが、レディー・ガガ側が最終的に中止を決定する要因となったと見られている。

6 マス・メディアにおける風向きの変化

マス・メディアにおいてLGBTに対する風向きが悪化したのはここ数年のことだ。2014年末にMUIが同性愛をハラム（禁忌）とするファトワー（拘束力のない法的裁定）を出すなどの動きがあり、2015－2016年頃にLGBT問題に関してインドネシアの民間TV放送局TV Oneがライブの討論番組を幾度か組んだ。それによって、LGBT問題に関する議論が盛んになって以降、LGBTを敵視する

風潮が目立つようになった。

2015年6月にアメリカで同性婚が合法になったというニュースを受け、同年7月TV Oneが、同性婚に関する討論番組を組んでいる²⁰。YouTubeにアップロードされている同番組の内容を閲覧してみると、冒頭で著名なインドネシア人アーティストたちが同性婚に賛成する内容のTwitter発言や、ニューヨークでゲイ・プライドに参加しているインドネシア人アーティストのニュースなどが紹介された後、「インドネシアの文脈においては、結婚は神聖で神への献身行為の一部であるから、国家は同性婚を認めることは決してない」とする宗教大臣の発言が紹介された。そしてその後に「さて、基本的人権の名の下に、インドネシアで同性婚は合法化されるのでしょうか？なぜならLGBTが実際にインドネシアに存在しているということは否定できない現実だからです。」というナレーションが入り番組が始まった。

同番組では、最初に自身がLGBTであるプレゼンター、ジェレミー・テティが以下のように発言した。「私に言わせりゃ、同性婚には、別に賛成ですね。両親が賛成する限り、なぜだめなんですか、そうでしょ？・・・(中略)・・・結婚するのは彼で、罪を犯すのも彼で、彼と彼の神様との関係であって、私たちは他人の神様になる必要なんてないじゃないですか。OK？・・・」そしてその直後に、彼がスタジオの観客たちに向かって「同性婚に賛成だよな？」と同意を求めると、「Ya (Yes)」と応じる声が聞こえてはいたが、「黄色いジャケット着てるインドネシア大学の学生も賛成するかい？」と意見を聞くと「Tidak (No)」の声の方が明らかに多く聞かれ、プレゼンターが「なぜ？」と問いかけると、スタジオには明らかに不穏な空気が流れた。そして同番組のプレゼンター、ジェレミー・テティは、番組内での同性婚を支持する大胆な発言が問題視され、後日ネット上で激しい非難を浴びた。

しかしながら、その後、2016年2月16日に放映されたTV Oneの討論番組²¹のタイトルは「LGBTをめぐる議論が盛んだ、私たちはどういう態度をとるか？ (“LGBT Marak, Apa Sikap Kita?”)」という中立的なもので、少なくとも同番組が放

映される時点までは、LGBTに対する社会的圧力がそこまで強くなかったと見てよいだろう。YouTubeにアップロードされている同番組を閲覧してみると、そこにはLGBT組織の活動家らがイスラム学者らと並んで討論を交わす場面が収録されている。

同討論番組において、当時インドネシア国内のモスクのイマーム（導師）同胞協会会長だったイスラム学者アリ・ムスタファ・ヤコブは、「LGBTは、麻薬、紛争、テロリズムと並んで、インドネシアを崩壊させるために特定勢力によって輸入されている四大問題だ」と発言している。テレビの討論番組において彼が一般市民の危機感を煽ったことによる社会的影響は小さくなかったと考えられる。アリは、討論の中で「超国家的な思想がモスクに入り込んできている」「インドネシアの国防は、現在はもう黄信号、LGBTが合法化されたら赤信号になる」「第二のイラク、レバノン、シリア、イエメンになりたくない！」「イスラム教において、LGBTに賛成するイスラム学者などいない！」と熱弁した。こうした発言はすぐにYouTubeなどのソーシャル・メディアを通じて一般のイスラム教徒たちの間で共有され、LGBTはテロや麻薬と並ぶ非常に危険な思想であるとする認識が急速に社会に浸透していったと考えられる。ちなみにリベラルな思想がインドネシアのイスラム社会を崩壊させ、経済的・政治的に支配するために西欧世界から意図的に送り込まれているとする捉え方は「陰謀論」と呼ばれ、インドネシア社会、とりわけ保守派イスラム勢力の間はかなり普及している考え方である。

上述の番組が放映されて以降、LGBTを擁護する声はめっきり聞かれなくなった。番組直後の2016年2月23日には、インドネシア放送委員会が、すべてのTV放送において女性のような立ち居振る舞いをする男性を出演させてはいけないとする通達を出し、リベラル派や世俗派の反発を招いた。またその後、以前LGBTの集会に出席し、LGBTの活動に賛同する趣旨の発言をしたことが取り沙汰された宗教大臣が、LGBTは原理主義、テロリズム、麻薬とともに宗教では認められない、と慌てて火消し発言をする場面もあり²²、LGBTを

擁護する発言は、今や政治家や官僚にとってタブーとなっていると言っても過言ではない。

現在ほとんどのマスメディアでは、LGBTは病気なのだから治療されることが可能で、彼らが「本来の自己」に合ったノーマルな状態に戻れるよう、国や社会は指導・支援すべきだとする論調が展開されている。ちなみにアメリカでは、19世紀以降、LGBTは精神医学会において精神病とされてきたが、1973年に精神病ではないとされた。だがインドネシアでは、一般的にそうは認識されていない。

インドネシアの主要イスラム系日刊紙『レプブリカ』は、2018年1月24日、LGBTを精神病ではないとする1973年のアメリカの精神医学会の決定は、LGBT団体や差別反対キャンペーンによる要求と圧力に屈し、投票結果に基づいてなされたものであり、学術的な研究成果に基づいたものではなかったとする記事を掲載している²³。同記事は、遺伝子がLGBTの主要な原因となっていることを否定する学者チャールズ・W・ソカリダス (Charles W. Socaridas) の見解を根拠とし、遺伝子的理由による生まれつきのLGBTは非常に数が少なく、ほとんどが環境によって無意識のうちにその生活スタイルとなったものだとする見解を掲載している。こうした見解が人々の間で広く共有され、多くのイスラム教徒たちが、LGBTについて非常にネガティブな見方をもつに至っている。

7 刑法改正案における LGBT 問題の扱い

2018年には刑法改正案が議論され、改正案策定の過程では、現行刑法においては結婚している男女に限定されている姦通 (zina) の解釈範囲を、同性間の姦通行為にまで拡大すべきかどうかの一つの争点となり、LGBT問題が政治イシューとして注目された。刑法改正の議論にLGBT問題が入り込むことになった直接のきっかけは、2017年12月14日に憲法裁判所が下した判決だった²⁴。

2016年に「インドネシア家族愛連盟（AILA）」が、現行刑法においては結婚している男女に限定されている姦通（zina）の解釈範囲を、同性間の姦通行為にまで拡大すべきだとして司法審査を請求していたのに対して、憲法裁判所が、「憲法裁判所には新たな規則を作る権限がない」として、これを拒否する判決を出したため、それならば刑法を改正する他ないとして、刑法改正案に注目が向けられることとなった。

最終的に国会に提出された刑法改正案におけるLGBTに関連する現行刑法からの主な変更点は次の通りである。すなわち、現行刑法では、処罰対象となる猥褻行為は、男性から18歳未満の女性に対しての暴力や脅しを伴う行為に限定されているが、改正案においては、年齢・性別を問わず、たとえ同性に対する行為であったとしても、また脅しや強制がなく合意の上であっても、公的な場での猥褻行為は刑罰の対象とされている点である。ただし私的な空間における行為については、猥褻罪は適用されないことが確認された。

最終的に改正案に規定された上記の内容だけを見れば、妥当にも思えるが、改正案の策定過程でメディアによって伝えられた議論をみていると、インドネシア社会が大きく変わる可能性があった、あるいは、近い将来に大きく変わる可能性もあるのではないか、と思わずにはいられない内容もある。以下、改正案策定に至る過程で出てきた議論を見ておこう。

まず2018年1月24日、MUIが、これまで婚姻関係にある男女に適用されていた姦通罪を、婚姻関係がない男女、男同士、女同士にも適用すべきであるとする案に賛成であることがマスメディアによって報じられた²⁵。姦通罪の適用範囲を同性間の性行為にまで拡大すべきだとする見解は、開発統一党（PPP）会派などからも出されていたもので、当初の改正案第494条では「正式な婚姻によって結ばれていない男性と女性は、性行為を行なったことにより、それぞれ最長5年間の禁固刑を科される」とされていたことが明らかになり、社会に大きな動揺をもたらした。なぜなら、もし婚姻関係がないカップルについても姦通罪が適用されることになれば、慣習法に従って結婚したカップルは、現在

の婚姻法では正式な婚姻とは認められないため処罰の対象となる他、秘密婚や妻に隠れての一夫多妻婚をしているカップルなども処罰の対象となるなど、多くの一般市民が犯罪者になってしまう可能性があるからだ。

また当初の改正案では、同条項は、「報告事由による」とされており、誰でも他人の姦通行為を報告することができることを意味していたため、人々が率先して（服装、食事、男女の行動などに関して戒律違反を取り締まる）道徳警察になって、他人の家や下宿、アパートに踏み込み、他人のプライバシーを侵害することが強く懸念された。さらにレイプ被害者であってもレイプであることが立証できなければ処罰の対象となる他、年齢制限が設けられていないために性的搾取を受けた未成年も処罰の対象とされてしまうなどの不備があることも指摘された。

最終的にはこれらの規定は削除されたが、この当初の改正案に対しては、LGBT組織の関係者のみならず、リベラル派のイスラム学者らが強い懸念を表明し、インターネットを通じて署名を集めてキャンペーンを行うサイト、Change.orgを通じてこの改正案に反対する署名活動が呼びかけられ、2018年1月29日から30日の昼までに8千もの署名が集まったと報じられている²⁶。当初の法案が最終的に見直された背景には、こうしたインターネットを通じた市民による反対運動の力も少なからず働いていたと思われる。

さらに刑法改正案の策定過程においては、当初からイスラム主義政党の開発統一党（PPP）会派が、LGBTのプロパガンダを処罰する条項がないことを問題視し、性的逸脱行為を宣伝する者に対しても刑事罰を科すことを提案していた。2月1日の時点では、国民信託党（PAN）会派で国会第1委員会副委員長のアナフィ・ライスも、LGBTのキャンペーンを行うこと、LGBTを正当化すること、プロパガンダを行うこと、大衆を動員することも処罰の対象となると述べたと報じられていた²⁷。しかしながら、最終的にこれらについては処罰の対象からは外され、LGBT当事者や擁護団体の関係者らは安堵した。

法案策定までの一連の報道を追っていると、バンバン・スサトヨ国会議長が

MUIの顔色を伺っていたことがよくわかる。ゴルカル党会派の同国会議長は、わざわざMUIを訪れ、マアルフ・アミン会長ら幹部たちを前にして、LGBTを許すような法律は作らないとし、もし改正案の中にLGBTを許すような条項が入れば職を辞するとまで宣言していた。

しかし、2018年2月6日、国会第三委員会で刑法改正案の修正作業が行われ
る中、ジョコ・ウィドド大統領が国連人権高等弁務官らの訪問を受け、LGBT
が差別されないようにとの要請を受けた²⁸。そして翌2月7日、国連人権高等
弁務官らの訪問の際、ジョコ・ウィドド大統領に随行していた法務・人権大臣
ヤソナ・ラオリが、刑法改正案における姦通とLGBTの問題に関連して、「国
家は私的な領域に介入すべきではない」と発言し釘を刺したこともあり²⁹、リ
ベラル派が懸念していた最悪の事態は避けられた。同年5月30日、国会議長
バンバン・スサトヨは、刑法改正案における議論のポイントについて、インド
ネシアは、シンガポールとは異なり、国家は私的な事柄には関与しないと明言
した³⁰。そして最終案では、LGBTに関連する条項については差別がないこと
が合意点として確認され、男性、女性、LGBTに拘らず、猥褻行為によって処
罰されるとされたことによって、改正案条文の中で「LGBT」の文言が使用さ
れることは避けられた。

8 おわりに

以上、インドネシアにおけるLGBT運動の進展過程と、同国のLGBT運動を
取り巻く近年の状況を考察してきた。インドネシアでは、イスラム文化圏とし
ては珍しく、これまでLGBT運動がかなり活発に行われてきていたが、同国の
LGBT運動の進展は、ここへ来て保守派イスラム勢力による強い反発に直面し
ている。LGBT脅威論は、マス・メディアやソーシャル・メディアなどを通し
て社会に広められ、現在一般のイスラム教徒たちの間からも明らかにLGBTに
対する否定的な意見が聞かれるようになってきている。

近年のインドネシアにおける反LGBT運動の高まりは、イスラム教徒が人口の大多数を占める国としてはもちろん当然の反応とも言えるだろう。しかし、同国においてLGBT脅威論が支持される要因の1つとして、多くのイスラム諸国が西側諸国の介入によって政情不安を経験してきたことが少なからぬ影響を与えているということは決して忘れてはならないことである。既述のように、現在LGBT問題は、インドネシアの保守派イスラム勢力から、麻薬、紛争、テロリズムなどと並ぶ脅威として捉えられており、それらの脅威が同国のイスラム社会を崩壊させる目的で西側諸国から意図的に持ち込まれているという陰謀論が支持され、LGBTに対する警戒感や危機感を高める結果となっている。先に紹介したTVの討論番組でインドネシア国内のモスクのイマーム（導師）同胞協会会長が口にした「第二のイラク、レバノン、シリア、イエメンになりたくない!」といった発言はそうした危機感を示すものに他ならない。そして、こうしたLGBTの「脅威」に対する注意喚起がモスクでの説教やソーシャル・メディアなどを通じて国内の多くのイスラム教徒たちに行われていることが、インドネシアにおけるLGBT問題を複雑化している。

また西欧の財団から資金を得て活動をしているLGBT運動の活動家やその支持者たちには猜疑の目が向けられ、活動が思うようにできない状況も生まれている。西側諸国の干渉によってイスラム諸国が不安定化させられ、国家が崩壊させられていくような国際情勢が続く限り、そうした陰謀論は、現実味を持って受け止められ、LGBTの諸権利に関する啓蒙活動を妨げる力として働いてしまう。

現在、インドネシア社会において顕在化しているようなLGBT問題をめぐる対立は、中東や南アジアのイスラム社会には見られないものであり、こうした対立は、民族的宗教的多様性を背景に、寛容なイスラム文化を育んできたインドネシアだからこそ生まれてきた状況である。

先行研究で紹介した「今日、西洋の新たな思想に影響を受けた知識人階層の中からも、再び同性愛者を受け入れようとする姿勢が生まれ始めている」とす

る現代インドネシア社会におけるLGBT受け入れに関するデデ・ウトモの見解は、LGBTに対する風当たりが現在のように強くなる以前に示されたものである。近年のLGBTを取り巻く状況を見るならば、西洋の新たな思想に影響を受けた知識人階層の中からLGBTを再び受け入れようとする姿勢が見られるのと同時に、1980年代以降、中東の保守的なイスラム思想が徐々に浸透し、LGBTをあからさまに排除しようとする姿勢が生まれ、両者が拮抗してきている。そしてそこには、西欧思想に影響を受けた世俗的なLGBT運動の潮流と西欧的な人権意識を共有する多元主義的（リベラル派）イスラムの潮流が協力関係を築き、保守派イスラム勢力と対峙している構図がある。

インドネシアの人々は、民主化時代の訪れとともにオープンに自らの考えを発信できる自由を享受し、ソーシャル・メディアの発展などを背景に、もともとフレンドリーでオープンな民族性を発揮してさまざまなネットワークを構築してきた。しかし、そのことは皮肉にも、LGBT問題がリトマス試験紙のように人々の考えや立場を可視化する役割を果たし、同国のイスラム社会内部の亀裂を深める結果となっているように見える。LGBTに対して寛容だったかつてインドネシアのイスラム社会は近年確実に変化してきている。同国の宗教的寛容性はその真価が問われる時代が来たといえる。

【注】

- 1 <http://emajapan.org/promssm/world> NPO法人EMA日本公式ウェブサイト
- 2 フレデリック・マルテルは、著書『現地レポート 世界LGBT事情—変わりつつある人権と文化の地政学』（岩波書店、2016）において中東やマグレブ地域のLGBTについてレポートしている。その中で、中東やマグレブ地域の今後について「最良のシナリオはトルコとインドネシアを手本にした変化だ」と述べ、これらの国では「同性愛は社会的にまだ受け入れられてはいないが、違法でもない」（p.268）としているが、インドネシアの状況は近年急速に変化してきている。
- 3 南スラウェシ、プギスの伝統社会においては、イスラムが伝播する以前、トランス・ジェンダーはビッス（bissu）と呼ばれ、その多くがチャラバイ（calabai）と呼ばれる女性的な男性で、プギスの伝統宗教において芸術家であり司祭を務めていたと言われる。彼

- らは、超自然の能力 (kesaktian) をもち、祖先の霊が宿る王宮に保管された神聖な宝物を護る者として社会的地位を認められていた。独立後から1960年代半ばまで続いたイスラム国樹立運動の時代、そしてその後の1965年の9月30日事件 (共産党クーデター未遂事件) 後まで、Operasi Toba (Operasi Taubat = 悔悟作戦) によってその多くが虐殺されたと言われるが、2003年には、再びビッスの就任式が行われるようになり、2008年の時点で約100名のビッスがいると報告されている。Ariyanto & Triawan, Rido, *Jadi, kau tak merasa bersalah!? Studi kasus Diskriminasi dan Kekerasan terhadap LGBT*, Arus Pelangi & Yayasan TIFA, 2008, pp.21-23参照。
- 4 Dédé Oetomo, “Now You See, Now You Don’t, Homosexual Culture in Indonesia,” *IIAS Newsletter* 29, November 2002. (https://iias.asia/sites/default/files/IIAS_NL29_09.pdf)
- 5 Dédé Oetomo, “Homoseksualitas di Indonesia,” *Prisma*, 7 Juli 1991, pp.84-96.
- 6 組織の正式名称に使用されたゲイを示す言葉はワダム (wadam) であるが、これは1968年に作られた造語である。かつてゲイはバンチ (banci) あるいはベンチョン (bencong) と呼ばれていたが、1968年頃に女性を意味する「ワニタ (wanita)」と人類最初の男性「アダム (adam)」から「ワダム (wadam)」という名称が作られた。差別や偏見が付きまといがちな古い名称を刷新することによって人々の意識を改革しようとしたものである。さらに1980年には、「ワニタ (wanita = 女性)」と「プリア (pria = 男性)」からの造語である「ワリア (waria)」へと変更され、1980年代半ば以降は組織名称としてゲイやレズビアン の名称が使用されるようになった。
- 7 1987年当時はKKLGN (ヌサンタラ・レズビアン&ゲイ・ワーキング・グループ) という名称であったが、後に「ガヤ・ヌサンタラ」に改称している。Gayaは「様式/スタイル」、Nusantaraは「インドネシア群島」を意味し、ガヤ・ヌサンタラは「インドネシア群島スタイル」という意味であるが、GAYaと表記することで、GAY (ゲイ) の文字を強調している。
- 8 <https://gayanusantara.or.id/portfolio/koleksi-majalah-g-gaya-hidup-ceria/>
- 9 *Laporan LGBT Nasional di Indonesia : Hidup Sebagai LGBT di Asia*, USAID, 2013. https://www.usaid.gov/sites/default/files/documents/2496/Being_LGBT_in_Asia_Indonesia_Country_Report_Bahasa_language.pdf
- 10 Sri Augustine, & Evi Lina Sutrisno (Eds.), *Mendengar suara Lesbian Indonesia, kumpulan buah pikir aktivis feminis & pluralis*, Ardhanary Institute atas dukungan HIVOS ROSEA, 2013.
- 11 Majelis Ulama Indonesia, *Himpunan Fatwa MUI Sejak 1975*, Penerbit Erlangga, 2011, p.381.
- 12 例えば高壁章 (7) : 80-81の以下のような章句だ。80. また (われは) ルートを (遣わした)、かれはその民に言った。「あなたがたは、あなたがた以前のどの世でも、誰も行わなかった淫らなことをするのか。81. あなたがたは、情欲のため女でなくて男に赴く。いやあなたがたは、途方もない人びとである。」(『日亜対訳・注釈 聖クルアーン』宗教法人日本ムスリム協会, 1982)
- 13 リベラル派イスラム学者、キアイ・フセイン・ムハンマドによるジェンダー平等の視点からイスラム法学を再構築する試みについては、以下の拙論を参照されたい。「ジェンダー

平等の視点からイスラム法学を再構築する試み—インドネシアのウラマー：フセイン・ムハンマド氏の思想と活動—」『イスラム科学研究 第5号』早稲田大学イスラム科学研究所、2009年、pp.29-42。また、ムスダ・ムリアによるイスラム改革思想については、以下の拙論を参照されたい。「書評：Muslim Reformis: Perempuan Pembaru Keagamaan（改革主義者のムスリム女性—宗教改革者である女性）」『国際ジェンダー学会誌 第4号』2006年、pp.132-136。

- 14 2017年8月24日、女性のための国家人権委員会本部にて、会長Masruchah氏へインタビュー。

Masruchah氏は、現代インドネシアの女性運動において重要な役割を果たしている活動家であり、その活動については、拙論（「第5章 インドネシアの女性運動とジェンダーの主流化—女性NGOの果たした役割」『東南アジアのNGOとジェンダー』田村慶子、織田由紀子編著、明石書店、2004年）を参照されたい。

- 15 2017年8月28日、国家人権委員会本部にて、教育&啓蒙部門のスタッフ、Yuli氏とUpi氏に筆者がインタビュー。

- 16 同意識調査は、平成16-18年度にかけて文部科学省の科学研究費を受給して実施したもので、その成果は「現代インドネシアにおけるイスラム教徒のイスラム教義理解と実践に関する意識調査（その1）：イスラム法の法制化について（デビット・コフリン教授 退職記念号）」『九州国際大学国際関係学論集』4(1/2), 117-157 (2009-03) に収録されているので、詳細についてはそちらを参照されたい。

- 17 2011年9月15日、Arus PelangiのオフィスにてArus PelangiのYuli氏に筆者がインタビュー。

- 18 イルシャッド・マンジ (Irshad Manji) は、1968年にインド人の父親とエジプト人の母親の下にウガンダで生まれたカナダ国籍のレズビアン・ムスリムで、改革主義的なイスラム解釈の提唱者として知られ、2003年には「オサマ・ビン・ラディンの最悪の悪夢」と称された人物である。彼女の著書“Alah, Liberty and Love”は2012年にマレー語にも翻訳されたが、同書の内容はマレーシア国内で危険視され、その後同書はマレーシア政府によって発禁扱いとされている。

ww1.utusan.com.my/utusan/rencana/20120525/

“Bahaya pemikiran Irshad Manji terhadap Islam Malaysia.”

<https://www.dakwatuna.com/2012/05/25/>

“Buku Irshad Manji Dilarang Beredar di Malaysia.”

- 19 詳細については以下の拙論を参照されたい。「イルシャッド・マンジ、レディー・ガガ、イスラム過激派FPI（イスラム擁護戦線）～揺さぶられるインドネシア・イスラム社会～」『インドネシア・ニュースレター』No.80, 日本インドネシアNGOネットワーク, 2012年..

- 20 Debat TV One 6 Juli LGBT Jeremy teti

<https://www.youtube.com/watch?v=kbHs2kvf8IE>

- 21 [Full] Indonesia Lawyers Club - "LGBT Marak, Apa Sikap Kita?" (16/02/2016)

- <https://www.youtube.com/watch?v=ByQG4pPaE7Y>
- 22 “Dibilang Beri Apresiasi LGBT, Ini Penjelasan Sikap Menag,” Selasa 08 Aug 2017
<https://www.republika.co.id/berita/nasional/umum/17/08/08/ouc8p396-dibilang-beri-apresiasi-lgbt-ini-penjelasan-sikap-menag>
- 23 “Jaringan LGBT dan Advokasi yang Keliru,” 24 Januari 2018.
<https://republika.co.id/berita/kolom/wacana/18/01/24/p31uno440-jaringan-lgbt-dan-advokasi-yang-keliru>
- 24 “MK tolak kriminalisasi LGBT dan hubungan di luar nikah,” 14 Desember 2017
<https://www.bbc.com/indonesia/indonesia-42348089>
- 25 “Dukung Uji Materi, MUI Setuju Semua Pelaku Zina Dipidana,” 21 September 2016.
<https://www.kiblat.net/2016/09/21/dukung-uji-materi-mui-setuju-semua-pelaku-zina-dipidana/>
- 26 “Hanafi Rais Desak Pemerintah Redam Propaganda LGBT,” 01/02/2018.
<https://www.cnnindonesia.com/nasional/20180201154540-32-273212/hanafi-raais-desak-pemerintah-redam-propaganda-lgbt>
- 27 “Petisi tolak RUU KUHP: ‘Bukan hanya menyasar kelompok LGBT,’” 30 Januari 2018.
<https://www.bbc.com/indonesia/trensosial-42869621>
- 28 “Bertemu Jokowi, Komisioner Tinggi HAM PBB Minta LGBT Tak Didiskriminasi,” 06/02/2018
<https://nasional.kompas.com/read/2018/02/06/12541121/bertemu-jokowi-komisioner-tinggi-ham-pbb-minta-lgbt-tak-didiskriminasi>
- 29 “Soal Zina dan LGBT di RUU KUHP, Menkum: Jangan Masuk Privasi Warga,” 7 Februari 2018.
<https://news.detik.com/berita/d-3854483/soal-zina-dan-lgbt-di-ruu-kuhp-menkum-jangan-masuk-privasi-warga>
- 30 “Bamsot: Aturan Soal LGBT di RUU KUHP Tak Menyasar Kamar,” 30 Mei 2018.
<http://www.teropongsenayan.com/87585-bamsot-aturan-soal-lgbt-di-ruu-kuhp-tak-menyasar-kamar>

【参考文献】

- 大形里美 (2004). 「第5章 インドネシアの女性運動とジェンダーの主流化—女性NGOの果たした役割」『東南アジアのNGOとジェンダー』田村慶子、織田由紀子編著 (pp.187-236), 明石書店.
- 大形里美 (2006). 「書評：Muslim Reformis: Perempuan Pembaru Keagamaan (改革主義者のムスリム女性—宗教改革者である女性)」『国際ジェンダー学会誌』4, 132-136.
- 大形里美 (2009). 「ジェンダー平等の視点からイスラム法学を再構築する試み—インドネシアのウラマー：フセイン・ムハンマド氏の思想と活動—」『イスラム科学研究』5, 29-42.

- 大形里美 (2009). 「現代インドネシアにおけるイスラム教徒のイスラム教義理解と実践に関する意識調査 (その1): イスラム法の法制化について」『九州国際大学国際関係学論集』4 (1・2), 117-157.
- 大形里美 (2012). 「イルシャッド・マンジ、レディー・ガガ、イスラム過激派FPI (イスラム擁護戦線) ～揺さぶられるインドネシア・イスラム社会～」『インドネシア・ニュースレター』80, 36-47.
- 宗教法人 日本ムスリム協会 (1982). 『日亜対訳・注釈 聖クルアーン』
- フレデリック・マルテル (2016). 『現地レポート 世界LGBT事情—変わりつつある人権と文化の地政学』岩波書店.
- Agustine, Sri & Evi Lina Sutrisno (Eds.), *Mendengar suara Lesbian Indonesia, kumpulan buah pikir aktivis feminis & pluralis* (『インドネシアのレズビアンの声を聞く、フェミニスト & 多元主義者活動家たちの着想集』), Ardhanary Institute atas dukungan HIVOS ROSEA, 2013.
- Ariyanto & Rido Triawan, *Jadi, kau tak merasa bersalah!?*
Studi kasus Diskriminasi dan Kekerasan terhadap LGBT (『それで、君は間違いを犯したと感
じないの!? LGBT に対する差別・暴力事件の研究』), Arus Pelangi & yayasan TIFA, 2008.
- IIAS Newsletter 29, November 2002.
(https://iias.asia/sites/default/files/IIAS_NL29_09.pdf)
- Majelis Ulama Indonesia (2011). *Himpunan Fatwa MUI Sejak 1975* (『1975年からのMUIのファ
トワー集』), Penerbit Erlangga.
- Muhammad, Kyai Husein & Siti Musdah Mulia, Kyai Marzuki Wahid (eds.) (2011), *Fiqh Seksualitas: Risalah Islam untuk Pemenuhan Hak-hak Seksualitas* (『セクシュアリティー法学：
性に関する諸権利を満たすためのイスラム・ブックレット』).
(<https://ia600509.us.archive.org/13/items/FIQHSeksualitas/FIQHSeksualitas.pdf>)
- Oetomo, Dédé (1991). “Homoseksualitas di Indonesia (インドネシアにおけるホモセクシュア
リティ),” *Prisma*, 7 Juli, 84-96.
- Oetomo, Dédé (2002). “Now You See, Now You Don’t. Homosexual Culture in Indonesia.”
- USAID (2013). *Laporan LGBT Nasional di Indonesia : Hidup Sebagai LGBT di Asia* (『アジアで
LGBTとして生きる：インドネシア国家報告書』).
[https://www.usaid.gov/sites/default/files/documents/2496/Being_LGBT_in_Asia_Indonesia_
Country_Report_Bahasa_language.pdf](https://www.usaid.gov/sites/default/files/documents/2496/Being_LGBT_in_Asia_Indonesia_Country_Report_Bahasa_language.pdf)
- Wieringa, Saskia E. & Evelyn Blackwood (1999). *Female Desires: Same Sex Relations and Transgender Practices across Cultures*, Columbia University Press.
(インドネシア語版 *Hasrat Perempuan: Relasi Seksual Sesama Perempuan dan Praktik Transgender di Indonesia*, Ardhanary Institute, 2009).

【付録1】インターネット資料 (新聞・雑誌)

- 1 *G:GAYa Hidup Ceria* (『G: 明るい生活スタイル』).
<https://gayanusantara.or.id/portfolio/koleksi-majalah-g-gaya-hidup-ceria/>
- 2 “Dukung Uji Materi, MUI Setuju Semua Pelaku Zina Dipidana (「司法審査を支持、MUI はすべての姦通者に刑事罰を科すことに賛成」)” (2016年9月21日付)
<https://www.kiblat.net/2016/09/21/dukung-uji-materi-mui-setuju-semua-pelaku-zina-dipidana/>
- 3 “Dibidang Beri Apresiasi LGBT, Ini Penjelasan Sikap Menag (「LGBT を賞賛したと言われたが、これが宗教大臣の姿勢説明だ」)” (2017年9月8日付)
<https://www.republika.co.id/berita/nasional/umum/17/08/08/ouc8p396-dibidang-beri-apresiasi-lgbt-ini-penjelasan-sikap-menag>
- 4 “MK tolak kriminalisasi LGBT dan hubungan di luar nikah (「憲法裁判所はLGBT と婚外交渉の犯罪化を拒否した」)” (2017年12月14日付)
<https://www.bbc.com/indonesia/indonesia-42348089>
- 5 “Jaringan LGBT dan Advokasi yang Keliru (「LGBT ネットワークと誤った権利擁護」)” (2018年1月24日付)
<https://republika.co.id/berita/kolom/wacana/18/01/24/p31uno440-jaringan-lgbt-dan-advokasi-yang-keliru>
- 6 “Petisi tolak RUU KUHP: 'Bukan hanya menyasar kelompok LGBT' (「刑法改正案を拒否する署名: 'LGBT グループだけが対象ではない」) ” (2018年1月30日付)
<https://www.bbc.com/indonesia/trensosial-42869621>
- 7 “Hanafi Rais Desak Pemerintah Redam Propaganda LGBT (「ハナフィ・ライスは政府にLGBT のプロパガンダを抑止することを要請」)” (2018年2月1日付)
<https://www.cnnindonesia.com/nasional/20180201154540-32-273212/hanafi-rais-desak-pemerintah-redam-propaganda-lgbt>
- 8 “Bertemu Jokowi, Komisioner Tinggi HAM PBB Minta LGBT Tak Didiskriminasi (「ジョコウィに会見、国連人権高等弁務官はLGBT が差別されないよう要請」)” (2018年2月6日)
<https://nasional.kompas.com/read/2018/02/06/12541121/bertemu-jokowi-komisioner-tinggi-ham-pbb-minta-lgbt-tak-didiskriminasi>
- 9 “Soal Zina dan LGBT di RUU KUHP, Menkum: Jangan Masuk Privasi Warga (「刑法改正案における姦通とLGBT の問題、法務大臣: 国民のプライバシーに介入しないように」)” (2018年2月7日付)
<https://news.detik.com/berita/d-3854483/soal-zina-dan-lgbt-di-ruu-kuhp-menkum-jangan-masuk-privasi-warga>
- 10 “Bamsoet: Aturan Soal LGBT di RUU KUHP Tak Menyasar Kamar,” (2018年5月30日付)
<http://www.teropongsenayan.com/87585-bamsoet-aturan-soal-lgbt-di-ruu-kuhp-tak-menyasar-kamar>

【付録2】インターネット資料（非刊行資料）

- 1 NPO 法人EMA 日本公式ウェブサイト

<http://emajapan.org/promssm/world>

- 2 [Full] Indonesia Lawyers Club - "LGBT Marak, Apa Sikap Kita? (LGBTをめぐる議論が盛んだ、私たちはどういう態度をとるか?)" (16/02/2016)

<https://www.youtube.com/watch?v=ByQG4pPaE7Y>

- 3 Debat [Live] Hak LGBT di Indonesia (インドネシアにおけるLGBTの権利) (Dede Oetomo dan Yuli I anggota MUI dan DPRD) TV One 06/07/2015

https://www.youtube.com/watch?v=zoGVPRF0_fl&t=145s